

# 学級担任によるカリキュラム・マネジメントの進め方の考察

高野 浩男・中井 義時

山形大学 教職・教育実践研究 第13号別刷

平成 30 年 3 月

# 学級担任によるカリキュラム・マネジメントの進め方の考察

高野 浩 男<sup>1)</sup> 中井 義 時<sup>2)</sup>

本研究は、新学習指導要領（2017）において三つの側面から整理されたカリキュラム・マネジメントについて、学級担任の視点からの進め方を考察することを目的とする。

総合的な学習の時間を中心とした教科等横断的なカリキュラムで進める『地域や学校の特色に応じた課題』に関する学習（第5，6学年）をカリキュラム・マネジメント三つの側面（以下、「カリマネ三つの側面」という。）を踏まえ計画、実践、評価、改善しながら取り組むとともに、その成果と課題を学校の総合的な学習の時間の全体計画へ反映させた。その結果、「カリマネ三つの側面」を踏まえた『カリキュラム・マネジメント表』を学級担任が創り、見える化の中で実践し、評価と改善を繰り返しながら進めていくことは、目標を具現化することにおいて有効であることがわかった。また、教職員全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの進め方について、学級担任による実践の成果等を学校の総合的な学習の時間の全体計画に反映していくという一つの進め方を示すことができた。

キーワード：総合的な学習の時間の全体計画、カリキュラム・マネジメントの三つの側面、カリキュラム・マネジメント表

## 1 はじめに

カリキュラム・マネジメントの定義<sup>註1)</sup>については、小学校学習指導要領（2017）における小学校教育の基本と教育課程の役割（第1章総則第1の4）の中で次のように示された。

「各学校においては、児童（生徒）や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。」

また、小学校学習指導要領解説総則編（2017）においては、これからのカリキュラム・マネジメントを充実していくための三つの側面（「教科等横断的なカリキュラムの作成」「評価と改善の充実」「人的又は物的な体制の確保」）及びカリキュラム・マネジメントの趣旨を踏まえた学校における教育課程の編成や改善に取り組

む際の手順の一例も詳細に示された。

カリキュラム・マネジメントという文言及びその意味・意義、教育方策としての必要性は、総合的な学習の時間が実施された頃から中留・田村（2004）、田中（2005）等によって提言されてきたが、この言葉が文部科学省の文章に初めて登場したのは、中央教育審議会答申（2003）「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」の中であり、その中では「校長や教員等が学習指導要領や教育課程についての理解を深め、教育課程の開発や経営（カリキュラム・マネジメント）に関する能力を養うことが極めて重要である。」と述べられている。次に登場するのは、中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」においてであるが、それは、「9. 教師が子どもたちと向き合う時間の確保などの教育条件の整備等」の文脈の、「(3) 効果的・効率的な指導のための諸方策」の一つとして、「教育課程や指導方法等を不断に見直すことにより効果的な教育活動を充実させるといったカリキュラム・マネジメントを確立することが求められる。」と示されている。

このことについて、合田（2015）は、「まず教職員定数の改善の重要性が指摘されているが、教員定数を増やすだけではなく、効果的・効率的な指導のために、

1) 山形市立第三小学校

2) 山形大学大学院教育実践研究科

教育課程におけるPDCAサイクルの確立が必要で、そのための位置付けとしてのカリキュラム・マネジメントであった。」と述べている。そして、2008年の学習指導要領解説（小・中学校）の総合的な学習の時間編において、「計画、実施、評価、改善」というカリキュラム・マネジメントの考え方とその方法が示され、カリキュラム・マネジメントの重要性は少なからず意識され始めたと言える。

新学習指導要領（2017）で注目すべきは、「教育課程の在り方を不断に見直す」というこれまでのカリキュラム・マネジメントの目的である「評価と改善の充実」に加え、「教科等横断的なカリキュラムの作成」「人的又は物的な体制の確保」の側面が加えられ、三つの側面として整理されたことである。その理由については新学習指導要領が目指す理念（「社会に開かれた教育課程」）を実現するための新たな側面を加えたカリキュラム・マネジメントを実施する必要であったと言える。「社会に開かれた教育課程」については抽象度の高い文言ではあるが、新学習指導要領（2017）の前文から、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有すること」「これからの社会を創りだしていく資質・能力は何かを教育課程において明確化していくこと」「社会との連携及び協働により目指すところの実現を図っていくこと」と要約できる。このようなことから、これまでのカリキュラム・マネジメントにおいては、教育課程の在り方を不断に見直す一連のPDCAサイクルが重視されてきたが、今後は、「社会に開かれた教育課程」を目指すことから、「人的又は物的な体制の確保」等二つの側面を加え、以下の三つの側面を示したと言える。

- ① 児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、
- ② 教育課程の実施状況の評価してその改善を図っていくこと、
- ③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

このように、新学習指導要領（2017）及びその解説編総則等では「カリマネ三つの側面」とその重要性について言及しているが、今回の改訂で大切なことは、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力等を、子どもの実態に応じて育成すべき目標に設定するとともに、その目標を達成するために、主体的、対話的で深い学びのある授業を意図的、計画的、継続的に実践してい

くということである。そして、このような継続的な実践を支えるのがカリキュラム・マネジメントであると考えている。

そもそも、カリキュラム・マネジメントの目的は学校教育目標をより効果的、効率的に具現化することであり、その意味で学校教育目標の具現化はカリキュラム・マネジメント実践上の根本的な課題であると言ってよい。田村（2014）は、カリキュラムマネジメントの定義を「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成していく仕組み」としてよりわかりやすく整理している。

図1は、山形県内小学校中堅教員等を対象に実施した学校教育目標具現化に関する調査<sup>注2)</sup>の結果である。学校教育目標の具現化等に関する調査については、「学校教育目標について保護者や子どもに説明できる。」（目標の理解）、「学校教育目標について定期的に評価し、取組の改善につなげている。」（目標の評価、改善）、「学校教育目標の達成感を持つことが多い。」（目標の達成感）、「学級経営目標は学校目標を具現化できるものである。」（目標と学級経営）と4項目について設問し、A：十分あてはまる（十分該当）、B：だいたいあてはまる（該当）、C：あまりあてはまらない（十分でない）、D：全くあてはまらない（不十分）から、最も近いものを回答してもらった。

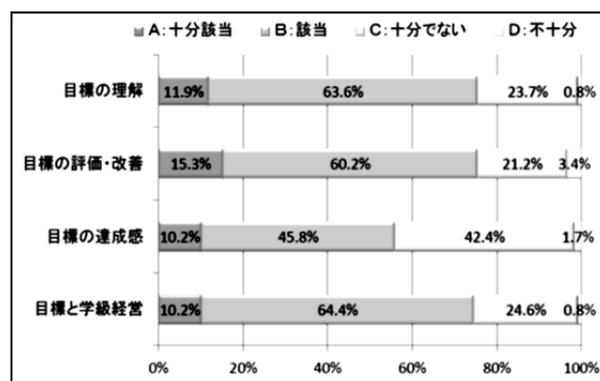


図1 学校教育目標の具現化等に関する調査結果（2017）

調査対象が教務主任等、学校経営に深く関わる教員であるが、学校教育目標の理解や評価、改善の取り組みについて「十分あてはまる」と回答した割合が非常に低い。「だいたいあてはまる」と回答した割合を加えると75%を超えるが、約25%の教員が目標を理解していない。さらに、目標についての達成感を持っている教員は、「十分あてはまる」と回答した割合が10.2%と低く、「だいたいあてはまる」と回答した割合45.8%

加えても、56%である。学校教育目標が達成できない理由は、達成のための取り組みが十分でないか、達成困難な高い目標を掲げているか、目標自体が具体性に欠け、評価が困難であったと言える。

また、適切な学校教育目標が設定されたとしても、その具現化のためのカリキュラム・マネジメントをどのように進めていくかという課題がある。図2も図1の調査と同じく、県内小学校中堅教員等を対象に実施したものである。「カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査」については、「カリキュラム・マネジメントについて理解している。」(カリマネの理解)、「カリキュラム・マネジメントについての研修を受けたことがある。」(カリマネの研修)、「学年等の年間教育計画について、教科等横断的な視点で内容を配列している。」(教科等横断的な指導計画)、「学年(学級)の子どもの実態を踏まえた指導計画を作成している。」(実態を踏まえた指導計画)と4項目について設問した。特に、「学年等の年間教育計画について、教科等横断的な視点で内容を配列している。」(教科等横断的な指導計画)の設問に対し、「十分あてはまる」(5.1%)「だいたいあてはまる」(22.9%)と回答した割合が低かった。

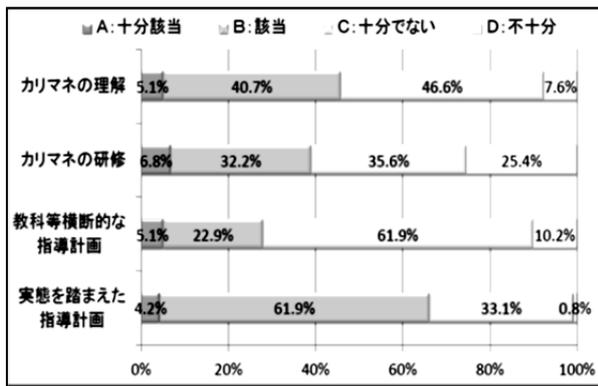


図2 カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査 (2017)

高野はこのような学習指導要領改訂の動きを山形県教育センター指導主事(2013.4.1～2016.3.31)の時から注目してきた。そして、山形市立第三小学校(2016.4.1～現在に至る。以下、「山三小」という。)赴任と同時に研究主任等学校経営の中軸に加わり、学校教育目標と新学習指導要領が目指す資質・能力との関わりを整理するとともに、学校教育目標を具現化するための「山三小総合的な学習の時間の全体計画」を、子どもに育てたい資質・能力の観点からも整理した。注目

すべきは、学級担任としての実践を通して学校の全体計画等を整理し、さらには実践を通して学校の全体計画の見直しを行い、より子どもの実態に即したカリキュラムにしていっていったということである。また、そのような中で、山三小が定めた総合的な学習の時間の高学年の内容である「地域や学校の特色に応じた課題」を通してカリマネ三つの側面を踏まえた指導の在り方を学級担任として2年間にわたって追求した。

本論文における高野の実践は、このような新学習指導要領において授業、教育課程、学校経営の改善・充実の要となる三つの側面を踏まえたカリキュラム・マネジメントの望ましい進め方を、小学校高学年における総合的な学習の時間の「地域や学校の特色における課題」の実践を通して、学級担任の視点から考察するものである。

このことは、前述した「学校教育目標具現化に関する調査結果」及び「カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査結果」に見える本県小学校の課題を解決していくことから高野の実践は意味のあるものである。(中井 義時)

## 2 研究の目的と方法

本研究は、新学習指導要領(2017)で整理されたカリマネ三つの側面を踏まえ、学級担任の視点に立ったカリキュラム・マネジメントの進め方について考察することを目的とする。

これまで、文部科学省がカリキュラム・マネジメントに求めてきたことの経緯や新学習指導要領(2017)の実施上の重要性については中井が述べてきたとおりである。その教育効果の分析・考察方法としては、下記の手順で実践を進め、その実践を教育の質の向上を目指す効果的な方策として新たに整理されたカリマネ三つの側面から分析・考察していく。

- (1) 既存の学校教育目標具現化に向けて、学級の子どもに必要な資質・能力を育成するための総合的な学習の時間の実践を試みる。
- (2) 上記(1)の実践を新学習指導要領が目指す資質・能力との関わりで整理するとともに、「山三小総合的な学習の時間の全体計画」を、子どもに育てたい資質・能力の観点から見直し既存の全体計画の改善を図る。
- (3) 第5, 6学年総合的な学習の時間「地域や学校の特色における課題」について、「カリマネ三つの側面」を踏まえた指導計画で実践し、アンケート調査や抽出した子どもの振り返りの変容等の分析を通して、その成果と課題を考察していく。(高野 浩男)

3 実践と考察

(1) 学校教育目標具現化計画の整理

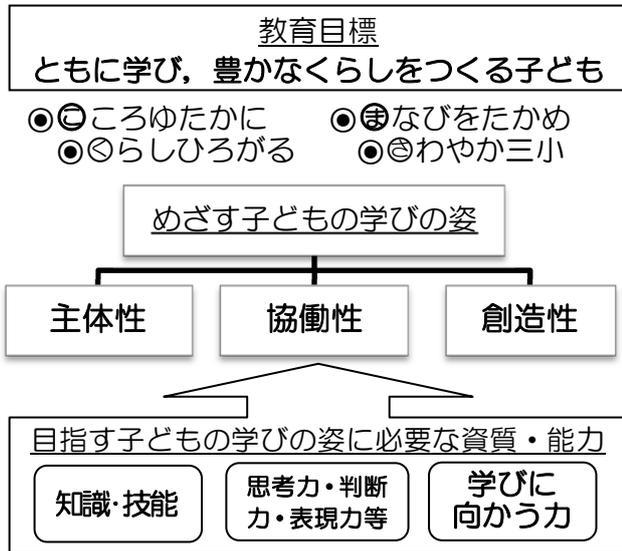


図3 山三小の学校経営及び研究全体構想の模式

図3のとおり、山三小では学校教育目標に掲げる子どもの姿の実現に迫るため、主体性、協働性、創造性の3つの視点で「目指す子どもの学びの姿」を設定した。

これらの視点で学校の教育活動を考え教育課程を編成することになるが、3つの視点について、日々の授業で、どのように学習を展開し、どのような子どもを目指したいのかを、教職員が、よりイメージできるようにした。校内研究の中で具体化を図り、学校経営の三本柱として、「主体性(自分の願いをもち学び続ける子ども)」、「協働性(かかわりながらともに学ぶ子ども)」、「創造性(学んだことを生かそうとする子ども)」と、子どもの姿で表し、全教職員で共有した。さらに、「目指す子どもの学びの姿」になるために必要となる育成すべき資質・能力を図3のとおり設定した。これは新学習指導要領で示されたものと同様であり、この資質・能力を育成することが目指す子どもの学びの姿の実現及び、教育目標の達成につながると考えた。

前述した山三小の「目指す子どもの学びの姿」に必要な資質・能力の育成に向けて、総合的な学習の時間では図4のように全体計画を作成した。

全体計画作成のポイントは以下の二つである。

一点目は、「総合的な学習の第一の目標」と山三小の教育目標を踏まえた「目指す子どもの学びの姿」を基に「山三小の総合的な学習の目標」を設定したことである。教育目標の実現に向けた「目指す子どもの学びの姿」(主体性、協働性、創造性)に必要な資質・能力として知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力の3つを設定した。

二点目は、各学校で定める内容について、学校や地域の実態を踏まえ、総合的な学習の時間の目標を実現するためにふさわしい「探究課題」と、その探究課題の解決を通して育成される資質・能力を具体的に示したことである。総合的な学習の時間が充実し子どもに目指す資質・能力が身に付けば、その他の教科等に共通して必要な資質・能力も身に付くことにつながる。

総合的な学習の時間全体計画					
※見やすいように加工済み(一部抜粋) 山形市立第三小学校					
総合的な学習の時間の目標 (第1の目標)		<b>学校教育目標・めざす子どもの学びの姿</b> ◆ 学校教育目標 とともに学び、豊かなくらしをつくる子ども ◆ めざす子どもの学びの姿 ○自分の願いをもち「学び続ける」子ども【主体性】 ・自分の願いや思いをもって進んで学び、新たな課題を見付け学び続けていく子ども ○かかわりながら「ともに学ぶ」子ども【協働性】 ・他「(ひと)」「もの」「こと」とかかわりながらより質の高い豊かな学びをする子ども ○「学んだことを生かそうとする」子ども【創造性】 ・獲得した知識や技能、「学び方」等を総動員して直面する問題を解決しようとする子ども			
↓					
本校で定める総合的な学習の時間の目標					
探究型学習を通して、「ひと」「もの」「こと」に粘り強くかかわりながら、主体的、協働的、創造的に問題を解決し、自ら学びを創り、自分の生き方を考えることができる資質・能力を育成する。 (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識・技能を身に付け、課題に対する考えを深めるとともに、自己の生き方を考えることができるようにする。【知識・技能】 (2) 実社会や実生活の中から、自ら課題を設定し、調査を通して得られた多様な情報をもとに、考える技法を活用しながら論理的に結論を導き、目的に応じてまとめ・表現することができるようにする。【思考力・判断力・表現力等】 (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、根拠に基づいた広く深く清らかな考え方で他者と交流をもちながら、よりよい社会参画の仕方を考え、実行しようとする態度を育てる。【学びに向かう力/人間性等】					
↓					
各学校が定める内容 I (地域や学校の特色に応じた課題)					
探究課題	知識・技能 (概念的知識)	思考力・判断力・表現力等			学びに向かう力 人間性等
		課題設定	情報の収集	整理・分析 まとめ・表現	
地域や学校の特色に応じた課題	【町づくり】 町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織等を対象に探究する。	・地域の一員として、町づくりや地域活性化にかかわろうとする活動や取組を知る。 ・地域の人々がつながり、支え合って暮らすよさを認識する。 ・町づくりや地域活性化に取り組んでいる人々や組織とその思いを認識する。	【高学年】 ・事象と自分を結び付けながら、学習課題を設定する。 ・目的意識を明確にもち、時に情報を収集・選択し、審視する。	【高学年】 ・情報をさまざまな観点から解釈し、批判的に読む。 ・情報をもとに、類推したり帰納的に考えたりし、知識や技能と関連付けて自分の考えをつくる。	【高学年】 ・追究を通じた自分の考えを論述する。 ・追究したことや、自分の考えを、目的や相手に応じて、わかりやすく表現する。(プレゼンテーション等)
	【伝統文化】				
	【地域経済】 商店街等の再生に向けて努力する人々と地域社会等を対象に探究する。	・地域の一員として、地域社会の再生にかかわろうとする活動や取組を知る。 ・社会の変化と地域の商店街等が抱える問題や商店街等の再生に向けて努力する人々の思いを認識する。	【高学年】 ・学習計画を修正したり改善したりする。		
【防災】					

図4 山三小総合的な学習の時間の全体計画

## (2) 第5学年(2016年度)での実践と考察

## ① 実践の概要

2016年度から本学年を担当しているが、4月当初の学びの姿からは、自分らしさを発揮して課題解決に取り組んだり、課題解決に向けて協働的に取り組んだりするという主体性に課題があり、「学びに向かう力」を高めていく必要があった。このような実態を踏まえ、地域をテーマにし、学校内外の人材と積極的に関わる学習を展開することで興味・関心をもたせながら「学びに向かう力」を高める実践を試みた。

このような子どもの現状に鑑み、まずは、担任から課題を提示することとし、探究課題を図4で示した「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織等を対象に探究する。」と「商店街等の再生に向けて努力する人々と地域社会等を対象に探究する。」を設定した。教材としては、北山形駅のシンボルでもある小便小僧に目を向け、北山形駅前商店街の活性化への糸口を掴ませたいと考えた。まず、現在、北山形駅周辺が店舗数も減り元気がなくなっていることを知るために町に出かけ聞き取り調査を行った。また、北山形駅周辺の今と昔の違いやその変遷について北山形駅前の魚屋店主に話を聞いた。その後、子どもによる話し合いの中で、「なぜ今は昔と違って賑わいが減ったのか」「少しでも昔のように元気な町にならないか」等の意見が出され、『地域の方々が元気になるような活動をしよう!』という学習テーマが設定された。そして、「地域を元気にする活動は何か」についての話し合いを重ねた結果、イベントとしての「たいよう祭り」を開催することが決まり、下記の8つのチームに分かれて準備にあたった。

- ア 手品を披露する
- イ 動画で地域を紹介する
- ウ みんなが元気になる看板をつくる
- エ みんなが元気になるポスターをつくる
- オ 小便小僧のグッズをつくる
- カ 小便小僧のスイーツをつくる
- キ 小便小僧の像をオリジナルでつくる
- ク NPO 法人が行う小便小僧の衣替えを手伝う

準備を進めるにあたり、オを除く7つのチームから準備に向けて詳しいことを教えてくれる人が必要であるという求めがあり、表1に示してある学習に関わる専門家や地域の人に関わってもらうことにした。子どもたちは、疑問に思ったことを質問したり、専門家の指導や助言を受けたりしながら準備を進めることができた。「たいよう祭り」の当日、約100名の保護者や祖

父母、地域の方々、そして、これまでお世話になった専門家の方々等が集まった。この中で、子どもたちは8つのチームごと学習の成果を発表することができた。

## ② 「カリマネ三つの側面」からの考察

本実践は、2016年度の実践であり、当初から「カリマネ三つの側面」を踏まえた計画による実践ではなかったが、この三つの側面から考察してみたい。

「カリマネ三つの側面」の「教科横断的な視点でのカリキュラムの作成」「評価と改善の充実」については課題が多い。学びに向かう力が高めることを意識し過ぎ、学習をどう進めるかが優先し、教科横断的な視点に立ってどのような資質・能力が育成できるのかという視点に立った単元計画での実践ができなかった。同時に、育成すべき資質・能力が子どもにどのように身に付いたのかという評価は十分でなかった。ただ、「人的又は物的な体制の確保」については、一定の評価を得ることができた。まず、表1にあるように高い専門性が必要な活動においては、校内外の専門家や地域の方の指導助言が受けられる環境を整えた。「たいよう祭り」当日まで複数回指導を受けた。その結果、表2のとおり、専門家の指導を受けることによって、子どもの振り返りに変容が見られた。A児、B児いずれも学習活動の質が高まり、専門的な知識や技能の習得、さらには学習に臨む態度の改善につながった。その他のチームにおいても表3のように校内外の専門家からの指導・助言による成果が得られた。

表1 第5学年実践における地域人材の活用

専門家	依頼内容
前山形女子専門学校の教員	北山形駅の小便小僧の歴史と衣替えについての説明
北山形駅前の魚屋店主	北山形駅周辺の今と昔の違いやその変遷についての話
ケーブルテレビの職員	地域の店や施設等を紹介する動画の作成指導
県マジック協会会長	手品の技術指導と披露の心構えについての指導・助言
芸工大の先生と学生	看板の制作とパンフレット、小便小僧のオリジナル像の制作についての指導・助言
地域の菓子店の経営者	小便小僧をモチーフにしたクッキー作りの指導
NPO 法人ぷらっとほーむ職員	小便小僧の衣替えで身に付ける衣装の制作に関する指導・助言

表2 子どもの振り返りの変容と評価

	振り返り（上段：専門家なしでの学習・下段：専門家との学習）	評価
A児	ダイナミックなマジックとみんなができるようなマジックを調べた。なかなかよいマジックが見つからない。チーム内のみんなはじゃっかんあせています。(2016.11.14)	完璧主義のA児であり、最初は、どのようなマジックを行うかが決まらず焦るだけであった。専門家の指導・助言により、マジックが決まり、練習をしていくうちに失敗することの大切さに気づき、内省的な振り返りになった。専門家との関わりにより、新たな自分に気付くことができた。
	手品に失敗してもかいたり、ごまかしたりせず恥をかいた方がよいということを学びました。これからは、まちがっても、堂々とゆっくり落ちていってやっつけていきたいです。(2016.11.17)	
B児	クッキーに必要な材料をパソコンで調べました。薄力粉、卵、チョコチップなどに決まりました。がんばっておいしいクッキーを作りたいです。(2016.11.10)	最初は、子どもだけで材料等を調べていたが、材料だけの情報で、具体性に欠け、どのような(味や形等)クッキーにするかが曖昧である。専門家からの情報と自分たちの考えを関連付けて具体的な表現になってきた。また、絵図が入ってきたり、算数の学習内容(百分率)が入ってきたりと、質的に高まってきた。
	小便小僧の形はこんな形(絵図で示された小便小僧)になる。この形のクッキーの下に土台がつけられる。小便小僧の部分の味はプレーンで土台はチョコチップ入りだけど、次回は、薄力粉の5%をココアパウダーに変えることになった。本番がとても楽しみだ。(2016.11.18)	

表3 地域人材の活用における成果

専門家	成果
前山形女子専門学校の教員	小便小僧の衣装替えへの関心の高まり
北山形駅前魚屋店主	昔の商店街の賑わいへの驚きと現状への不安(現地調査のきっかけ)
ケーブルテレビの職員	撮影の仕方や動画編集についての理解
県マジック協会会長	手品の技術の習得と手品に対する心構えの理解
芸工大の先生と学生	木工、デザイン等に関する知識と技能の習得
地域の菓子店経営者	クッキー作りの知識と技能の習得
NPO法人ふらっとほーむ	衣装替えの企画力と裁縫に関する知識・技能の習得

以上のことから、「カリマネ三つの側面」の「人的又は物的な体制の確保」については、その有効性が明らかになったと言える。校内外の専門家や地域の人の指導を得ることで、子どもの学びに向かう力の高まり、各自の課題解決に必要な知識・技能の習得が見られ、学習活動の質の向上につながった。

一方で、2016年度末5年生の学習を振り返るアンケートで、「三小学区(地域)は好きですか?」の質問に

対する回答結果は表4に示すとおりであり、良い結果を得ることができなかった。

表4 アンケート結果(2017年3月調査)

	好き	どちらかという好き	どちらかという嫌い	嫌い
男子	0%	36%	28%	36%
女子	0%	41%	59%	0%
全体	0%	39%	47%	14%

※男子14名 女子18名 計32名 高野学級で実施

「どちらかという嫌い」「嫌い」を合わせると、およそ6割の子どもが自分の地域について肯定的な印象をもっていないという実態であった。北山形駅周辺を中心に町に出かけ、聞き取り調査を行ったり、地元の方にお話をお聞きしたりしながら地域の過去と現在の違いに気付くことができた。また、「たいよう祭り」を企画・実施し多くの地域の方々や保護者等に喜んでいただいた。子どもの成就感も得られ、教師の予想としては、多くの子どもが地域に対して肯定的な思いをもっているものと考えていたが、結果は違っていた。「たいよう祭り」という全体としてのイベントの成功は、学級としての目標達成の成就感をもたせることはできたが、子ども一人一人の地域への興味・関心や肯定感を高めるには十分でなかったと言える。このような課題を踏まえ、第6学年での実践に向かった。

(3) 第6学年(2017年度)での実践と考察

① 「カリマネ三つの側面」に留意した『カリキュラム・マネジメント表』を作成しての実践

前述したとおり、子どもたちの地域に対する興味・関心や愛着が低い結果だった。このことから、子どもと話し合い、自分なりの「地域のよさ」を発見し、『地域のよさをPRしよう!』という学習をスタートした。(学習活動の概要は次頁【カリキュラム・マネジメント表】参照)

学校教育目標を具現化するにあたっての子どもの資質・能力の育成であるが、第5学年での実践では、子どもの活動を進めることが中心になり、子どもの資質・能力に対する指導と評価を十分に行うことができなかった。また、子ども自身の学習の振り返りは実施してきたが、教師の評価等の助言が十分なされなかったため、振り返り自身が形骸化し、振り返りによる問いや次の学習への意欲、自分の成長の確認等、子どもの学びに向かう力が強化されなかった。学習終了後の

総合的な学習の時間「地域のよさをPRしよう！」を中心にしたカリキュラム・マネジメント表 山形市立第三小学校 6年1組 高野浩男（作成）

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	2	3	
	<p><b>III 課題解決のための主な手立て</b></p> <p>三つの側面から整理されたカリキュラム・マネジメントを通して学びに向かう力である主体性を育む。</p> <p>①「教科等横断的なカリキュラム」を作成し、教科等で身につけた知識・技能等を総合的な学習の時間で活用していくことの喜びを実感し学習に対する意欲を強化していく。</p> <p>②「振り返り」をしっかりと見届け、必要に応じて支援し学びに向かう意欲を支え、評価を通して指導の改善を図る。</p> <p>③地域人材を適切に活用し、地域学習への関心・意欲を高めていく。</p>											
	<p><b>II 重点目標に対する子ども達の現状と課題</b></p> <p>第五学年の地域学習後の調査から、子どもたちの地域に対する興味・関心や愛情が予想以上に低かった。学習に向かう主体性はますます低くなっていく傾向があり、地域に対する思いや願いを高めていく必要がある。</p> <p>また、子ども達の「振り返り」からは、自分のためをしっかりと持った活動をしていない場合も見られ、「振り返り」から次の学びに向かう意欲等が引き出されるようにしていく必要がある。</p>											
	<p><b>IV 学級の重点目標を具現化するカリキュラム・マネジメント構想—総合的な学習の時間「地域のよさをPRしよう！」を中心にしたカリキュラム—</b></p>											
	<p><b>【協働性】</b></p> <p>○自分や他者との違いに気づき、認め、折り合いをつけて活動する子ども</p>											
	<p><b>【主体性】重点</b></p> <p>○思いや願い、意見をもち、考えを出し合っ課題解決に取り組む子ども</p>											
	<p><b>【創造性】</b></p> <p>○学んだことを積極的に活用し、自分の学びをより豊かにしていく子ども</p>											
	<p><b>人的又は物的な体制の確保</b></p> <p>山形大学の先生に「地域学習の進め方」を学ぶ 東北工科大学の先生に「宮町七不思議」の話を聞く 村山民族学会の先生方に「宮町七不思議」の話を聞く</p>											
	<p><b>1 課題を設定する</b></p> <p>2 PRの仕方を考える(町で、どこで、誰に) ・パンフレット等 ・修学旅行 ・山形駅 ・HP 等</p> <p><b>3 地域のよさを調査</b></p> <p>4 地域のよさをPRするパンフレット作成 ① 調査活動Ⅰをする。(夏休みの課題) ② 「地域を学ぶ」の講話を聞く。(山本先生) ③ 調査活動Ⅱをする。 ④ 調査活動Ⅲをする。 ⑤ 「宮町七不思議」の話を聞く。(村山民族学会)</p> <p><b>5 修学旅行PRグッズ作成</b> 作成したパンフレットの評価 ① 芸工大の先生や学生にパンフレットや葉の作り方を学ぶ ② パンフレットⅡの作成 ③ 葉(PRグッズ)の作成</p> <p><b>6 東京でのPR活動</b></p> <p>7 パンフレット作成第二弾と山形におけるPR活動 ① パンフレットの作成 ② 山形駅等におけるPR活動</p> <p>8 活動の振り返り</p>											
	<p><b>道徳「郷土愛①」</b> ◆郷土の発展に尽くす伝統と文化を育てた先人の努力を知る。</p> <p><b>道徳「郷土愛②」</b> ◆自分も郷土の伝統と文化を継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、努力する心構えを持つ。</p> <p><b>社会「長く続いた戦争と人々のくらし」</b> ◆第二次世界大戦を理解し歴史の意味を考える。</p> <p><b>国際「平和のとりでを築く」</b> ◆平和について、意見交換を通して協働の場をつくり、文章全体の構成や展開を考える。</p> <p><b>図画「旅の思い出」</b> ◆旅行の思い出を絵に描き、友達に送る。</p> <p><b>国語「平和のとりでを築く」</b> ◆平和について、意見交換を通して協働の場をつくり、文章全体の構成や展開を考える。</p> <p><b>特別「修学旅行」</b> ◆異文化に親しむ ◆集団生活や公衆道徳の体験を積み、</p>											
	<p><b>教科横断的なカリキュラム</b></p> <p>学習内容：「J」内 資質・能力：◆ ・演習・能力との関連 ・学習内容の関連</p> <p><b>道徳「郷土愛①」</b> ◆郷土の発展に尽くす伝統と文化を育てた先人の努力を知る。</p> <p><b>道徳「郷土愛②」</b> ◆自分も郷土の伝統と文化を継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、努力する心構えを持つ。</p> <p><b>社会「長く続いた戦争と人々のくらし」</b> ◆第二次世界大戦を理解し歴史の意味を考える。</p> <p><b>国際「平和のとりでを築く」</b> ◆平和について、意見交換を通して協働の場をつくり、文章全体の構成や展開を考える。</p> <p><b>図画「旅の思い出」</b> ◆旅行の思い出を絵に描き、友達に送る。</p> <p><b>国語「平和のとりでを築く」</b> ◆平和について、意見交換を通して協働の場をつくり、文章全体の構成や展開を考える。</p> <p><b>特別「修学旅行」</b> ◆異文化に親しむ ◆集団生活や公衆道徳の体験を積み、</p>											
V 指導の手立て	<p><b>知識・技能</b></p> <p>◆地域の一員として地域を見つめ直し、地域のよさを認識する。</p> <p>◆その学習に関するレディネスを把握する。</p> <p>◆思考スキル、思考ツールを活用する。</p> <p>◆学習前と学習後の自分を比較する。</p> <p><b>【主体性】</b></p> <p><b>思考力・判断力・表現力等</b></p> <p>◆各自が調べた地域のよさに関係する情報を整理し、類推したり帰納的に考えたりすることで、何を最優先にPRするかを考える。</p> <p>◆課題を考えるための着眼点をばらばらにする。(風方)</p> <p>◆着眼点を基に、どのように考えればよいかをはっきりする。(考え方)</p> <p>◆思考スキルを意識し、思考を可視化し付箋などを使って操作化できるようにする。</p> <p><b>【協働性】</b></p> <p><b>学ぼうに向かう力</b></p> <p>◆各自が見つけた地域のよさをPRして、地域のために貢献する活動に取り組んでいる。</p> <p>◆体験的・活動的な学習(共通体験)を仕組む。</p> <p>◆ペアやグループ学習は児童の必要感を大切にす。</p> <p>◆振り返りを行い、互いに共有する場をもつ。</p>											
VI 評価①	<p><b>【主体性】</b></p>											
VI 評価②	<p><b>【創造性】</b></p>											
VII 評価①	<p>三つの側面①「教科等横断的なカリキュラムの作成」</p>											
VII 評価②	<p>三つの側面③「人的又は物的な体制の確保」</p>											

図5 総合的な学習の時間「地域のよさをPRしよう！」を中心にしたカリキュラム・マネジメント表

アンケートで地域に対する肯定感が十分でなかったのも、子どもに付けたい資質・能力としての「学びに向かう力」に課題があったと考えた。また、学習を進める上で「カリマネ三つの側面」の重要性は理解しても、実践上いくつかの課題があったことは前述したとおりである。

そこで、第6学年での実践にあたっては、「カリマネ三つの側面」に留意した、『カリキュラム・マネジメント表』を作成し、教師自身が目標具現化のための学習活動、指導の手立て、子どもの評価を見える化、意識化して進めるようにした。図5は、総合的な学習の時間『地域のよさをPRしよう!』を中心にした『カリキュラム・マネジメント表』である。

この『カリキュラム・マネジメント表』は、学級教育目標等を具現化するものではあるが、重点として取り組む単元を選択して、「目標達成のための小さなカリキュラム」を基本にしている。特に、小学校学習指導要領総則(2017)で整理された「カリマネ三つの側面」に留意した。以下は、『カリキュラム・マネジメント表』作成のポイントである。(図5参照)

上段に示した内容は、「Ⅰ目標について」、「Ⅱ目標に対する子どもの現状と課題」、「Ⅲ課題解決のための手立て」である。目標については学校教育目標を受け、主体性、協働性、創造性の観点から学級で目指す学びの姿を書いている。特に重点としたのは、「思いや願い、意見を持ち、考えを出し合って課題解決に取り組む子ども(主体性)」である。「Ⅱ目標に対する子どもの現状と課題」の欄には重点目標に対する子どもの現状と課題を記載した。従って、「Ⅲ課題解決のための手立て」の欄も重点目標と対応した内容になっている。尚、学校教育目標を受けた学級目標(主体性・協働性・創造性)達成の手立て及び評価については、「Ⅴ指導の手立て」と「Ⅵ評価①」に記載できるようにした。

中断には、総合的な学習の時間『地域のよさをPRしよう!』の学習活動の流れと関連する教科等の単元・題材名を、内容及び資質・能力の視点から記述し、「教科等横断的なカリキュラム」として表した。

国語との関連では、6年生の1学期に学習する「ようこそ私たちの町へ」の学習を2学期に移動した。この単元での学習はパンフレットを作成して地域のよさを紹介していくものである。ここでは、国語の資質・能力の思考力・判断力・表現力等である

- (ア) 目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にする

こと。

- (ウ) 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
- (エ) 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。

を身に付けることが目標となる。総合的な学習の時間におけるパンフレット作成時の2学期に国語の学習で実施し且つ、国語で身に付けた資質・能力を使って、総合的な学習の時間で作成するパンフレットに活かしていくことは総合的な学習の時間のパンフレットもよりよいものになるだけでなく、パンフレットづくりを通して育成したい資質・能力としての思考力・判断力・表現力等をも高めることになる。このように、パンフレットを扱うという学習内容だけで表面的に関連を図るのではなく、そこで育成される資質・能力は何なのかを明らかにした上で、関連を図ることが必要であると考え、教科等横断的なカリキュラムを作成した。同じような考え方で社会・図工・道徳・特別活動(修学旅行)等とも関連を図った。

図工については、当初、関連等は考えていなかったが、学習を進めていく中で必然的に図工との関連を図ることになった。本来、計画してあった「東京への修学旅行でのPR活動」におけるPRグッズとして、パンフレットはもらった人が喜ぶだろうか。もらっても捨ててしまうのではないかという話題が出た。みんなで議論した結果、もらった人が喜ぶものとして、「葉」が浮上り、急遽、「葉」を作成することになった。しかし、小さい「葉」にパンフレットの情報をどのように表現するかという新たな疑問が生じた。そこで、昨年度も指導いただいた芸工大の先生方にパンフレットの作成で生じた疑問解決と「葉」作成のポイントについて指導をしていただくことにした。勿論、図工の時間として実施した。指導に当たっては、2017年改訂の小学校学習指導要領解説図画工作編第5学年及び第6学年における「思考力・判断力・表現力等」に関する「A表現」(1)イ「絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと」を踏まえ、図工で育成する資質・能力について指導をしていただくよう打合せを行った。

このようなプロセスを辿りながら、図5に示す教科等横断的なカリキュラムが完成した。尚、このカリキュラムを進めていく上で必要となる校内外の専門家と

して、芸工大の先生方等の活用を図った。また、第5学年での実践の課題から、「学びに向かう力」を育成するには郷土に対する興味・関心や愛情を育むため、山形大学の先生や村山民俗学会の先生のお話を通して、主に、郷土の歴史や産業の様子等について学んだ。さらに、山形鑄物の発展に寄与した長谷川雅山氏の子孫である長谷川雅也氏から、山形鑄物の発展に寄与した雅山氏の努力・工夫のお話を聞く学習も設定した。

『カリキュラム・マネジメント表』の下段は評価を記載することにした。「カリマネ三つの側面」の「評価と改善の充実」について、特に総合的な学習の時間においては、日々の学習における子ども個々の評価を適切に実施していくことが重要であると考えている。

② 考察

学びに向かう力を高めることを重点課題にして取り組んだ『地域のよさをPRしよう!』の実践を、学習活動での子どもの姿、地域への興味・関心や肯定感に関する調査結果、振り返りから見えるC児の変容から考察し、「カリマネ三つの側面」を踏まえた『カリキュラム・マネジメント表』に基づく実践の成果と課題を整理していく。

学習活動での子どもの姿であるが、学習の導入で山形大学の先生から「地域のよさ」についての話を聞いたり、村山民俗学会の先生に「宮町七不思議」の説明を聞いたりしながら、子どもも実際に調査活動を繰り返した。子どもは、自分なりの「地域のよさ」を見付けることができた。そして、国語の学習を通して地域のよさをPRするパンフレット作成を行った。子どもたちはパンフレット作成に興味を持ち、山形県内のパンフレット等を集め、パンフレットにはどのような特徴があるのかを分析した。さらに、昨年度に引き続き外部の専門家として芸工大の先生方から、主にパンフレットにおけるデザイン面について図画工作と関連を図りながら指導・助言をしてもらった。同時に作成したパンフレットをどのようにPR活動に使っていくかについて話し合いを進め、修学旅行で県外の人に手渡しをしたいという願いが生まれた。それには、手書きのパンフレットを増し刷りしなければならずカラーでなくなるという問題が生じた。また、子どもの経験から町でチラシやパンフレットをもらっても興味がないとそのまま捨てられたり、受け取ってもらえなかったりするのでという意見が出された。そこで、パンフレットに加え、PRグッズとして本に挟む「栞」に、PRする内容を絞って盛り込み手渡しすることになった。「栞」の作成の際も、芸工大の先生方から指導・助

言をしてもらった。修学旅行の半日を活用して、作成したPRグッズ（「栞」）を県外の人に手渡しすることができた。その後、「栞」をもらった方々から御礼のメールをもらうことができ、PR活動の効果を実感することができた。子どもたちは、PR活動第二弾を行うことになり、前回のパンフレット作成の反省を基に、県内の人たちへのPR活動が行われた。

次に、第5学年での実践を踏まえた第6学年での実践課題「地域への興味・関心や肯定感を高める」ことについての調査結果であるが、前述した表4のアンケート同様に再度実施した。結果は表5のとおりである。

表5 アンケート結果② (2018年1月実施)

	好き	どちらかという好き	どちらかという嫌い	嫌い
男子	21% (0%)	65% (36%)	7% (28%)	7% (36%)
女子	6% (0%)	82% (41%)	12% (59%)	0% (0%)
全体	13% (0%)	74% (39%)	10% (47%)	3% (14%)

※ ( ) 内は第5学年時の2017年3月調査結果

※男子14名 女子17名 計31名 高野学級で実施

昨年度末に比べると地域のよさに気付き「地域のことが好き」という子どもの割合が大幅に伸び、学級全体でおよそ9割弱である。これは大きな変容である。

最後は、地域への興味・関心、学びに向かう力が高まったC児の変容を、授業で使用する「振り返りシート」の記載事項を基に述べる。(誤字脱字等もあるが、C児の表現をそのまま記載)

C児は、振り返りもほとんど書かない子どもであったが、第5学年での「振り返りシート」の主なものをあげると表6のような一言の振り返りである。

表6 C児の「振り返りシート」(第5学年)

月日	C児が書いた振り返り(原文)
9月29日	ノートをかいてた(しらべること)
9月30日	やることをかんがえた
10月13日	さかなやさんにむかしのことをきけました。むかしのさんしょうをしりました。へー
11月4日	きょうわよさんをきめました
11月8日	きょうは、はじめてしごとをした

C児とは個別に対話したり、C児の活動の支援等も重点的に行なったりしてきたが、C児の「振り返りシート」からは学びに向かう力等を見ることはできなかった。

表7は、第6学年におけるC児の「振り返りシート」である。

表7 C児の「振り返りシート」(第6学年)

11月1日
今日は、パンフレット作りで計画をたててからパソコンルームで両所宮の事を調べ、パンフレット作りの準備をした。チームの人達とぶんとんして行った。自分は、パソコンのジャストスマイルでパンフレットの紙を書いた。次の総合では、他の人が調べてきた事をまとめてパンフレットにのせてPR企画を進めたい。

パンフレットを作成するための計画を立て、パソコンで調べるという一連の学習過程が意識されている。また、班員と分担して活動している様子も見取れる。さらには、次の時間の見通しもった振り返りになっている。C児は、6年生になってから、総合的な学習の時間における実行委員に立候補し、話し合いの黒板書記を行っている。また、C児の表5のアンケート結果は、「好き」を選択しており、5年生のときの「どちらかという嫌い」から、地域に対する肯定的な見方ができるようになってきている。

『地域のよさをPRしよう!』というテーマでの第6学年での実践を、学習活動での子どもの姿、地域への興味・関心や肯定感に関する調査結果、振り返りから見えるC児の変容から見えてきたが、第5学年での実践と比較しても大きな変容を見ることができた。

その要因について「カリマネ三つの側面」から考察していくこととする。

「教科横断的な視点でのカリキュラムの作成」の側面からは、教科横断的なカリキュラムを作成するために、『カリキュラム・マネジメント表』を作成し、国語や図工等と関連を図ったり、内外リソースとして芸工大の先生方、山形大学や村山民俗学会の先生方に関わってもらったりした。そのことで、パンフレットやPRグッズ作成に関する本来子どもが身に付けている知識や技能が引き出されたり、新たな知識が得られたりして、作成物の質も高まり子どもにとって納得のいくものとなった。結果、自信をもって、修学旅行先で県外の人に手渡しすることができた。さらに、外部の先生方から地域についての情報を聞くことで地域に関する知識が増えた。そのことを実際に確かめたくなり、調査活動の意欲が高まっ

ていった。さらに、聞いた情報と実際に調査した事実が関連付けられ、聞いた情報が確かな知識へと変容し、これまで気付かなかった自分なりの「地域のよさ」を見付けられるようになった。

このように、『カリキュラム・マネジメント表』を基に、教科横断的なカリキュラムを作成し、それに基づいた教育活動を展開するにあたり、積極的に校内外の人的又は物的資源を活用することで子ども一人一人の学習の質が高まり、子どもの地域に対する見方に変容が見られた。「教科等横断的なカリキュラムの作成」と「人的又は物的な体制の確保」を関連付けて教育課程を編成していく進め方は、教育活動の質の向上につながる。

「評価と改善の充実」の側面からは、育成すべき資質・能力の共有と合わせて、その資質・能力が子ども一人一人に確実に育成されたのか否かを適切かつ合理的に評価する方法を明らかにしていくことが必要である。そのためには、『カリキュラム・マネジメント表』を使って、育成すべき資質・能力について重点化を図っていくことが求められる。評価規準が多かったり、評価基準が複雑だったりすると評価しきれないという事態に陥る。また、子ども一人一人が、確実に育成すべき資質・能力を身に付けられるよう、本実践のように総合的な学習の時間を中核に教科横断的な視点から教育課程を編成することは有効であったと言える。

「人的又は物的な体制の確保」の側面からは、第5学年での実践及び上記で述べたように、本物・本質に触れたことによる知識・技能の習得、学びに向かう力の高まりへの効果は大きかった。

このことから、「教科横断的な視点でのカリキュラムの作成」「評価と改善の充実」「人的又は物的な体制の確保」は相互に関わり合いながら効果を示すことがわかった。その意味でも「カリマネ三つの側面」を踏まえた『カリキュラム・マネジメント表』の作成による実践は、これからのカリキュラム・マネジメントの進め方の一つとして提案できる方策であるという結論に至った。

#### (4) 2年間の実践に基づく「山三小総合的な学習の時間の全体計画」の改善

学校における総合的な学習の時間の全体計画については、実践の成果をより子どもの実態に即したものに改善していくことが望ましい。学級担任としての2年間の実践から、下記により総合的な学習の時間の全体計画を改善していくこととした。

一点目は、探究課題の追加である。図2のとおり、

地域や学校の特色に応じた課題として現在は4つの探究課題が設定されているが、2年間の実践を通して新たに「町の魅力」(地域のよさや課題を対象に探究する)を加えたい。

二点目は、追加した上記の探究課題の解決を通して育成される「知識・技能」の追加である。次年度の総合的な学習の時間の全体計画に追加したい「知識・技能」は次のとおりである。

ア 地域の名所や旧跡、商店街、地域で生産・販売されている特産物等、町の魅力に気付く。

イ 町の魅力を守り続ける取組に力を注ぐ地域の人々の思いを認識する。

ウ 自分たちも町の魅力を継承していく活動ができることを認識する。

三点目は「カリマネ三つの側面」から成果として明らかになったことを加えることである。「教科等横断的な視点でのカリキュラムの作成」については、新たに項目を起こし、内容及び資質・能力の両面から関連する教科等の単元・題材名を記述していく。同じように、「人的又は物的な体制の確保」の項目も起こし、活用した人材について参考として記述していく。

これらは、いずれも学級担任が2年間の実践を通して明らかになった総合的な学習の時間の全体計画の改善点である。学級担任のより主体的な学校経営への参画という視点からも、全体計画に沿って実践を試みるだけでなく、子どもと教師の思いや願いが融合した実践を通して得られた成果を積極的に全体計画に取り入れていく取組が求められる。そのことにより、全体計画が形骸化せず、常に実践を通して計画が更新されていく実効性の高いものとなる。(高野 浩男)

#### 4 おわりに

本論主題「学級担任によるカリキュラム・マネジメントの進め方」として明らかになったことの一つ目は、「カリマネ三つの側面」を踏まえた『カリキュラム・マネジメント表』を作成しての実践は、教育活動の質の向上を図ることができたということである。

1年目、第5学年での「地域の方々が元気になる活動をしよう!」の実践の結果を「カリマネ三つの側面」から分析してみると、三つの側面の「人的又は物的な体制の確保」については、有識者や地域人材等カリキュラムに位置付けて活用されれば、その効果があることは子どもの振り返りからも明らかである。「人的又は物的な体制の確保」は、計画段階で活用の目的に即した適正な位置付けができるかどうかのポイントとなる。

その意味では、第5学年の実践で活用された7人の人材は適切にカリキュラムに位置付けられたと言える。

「教科等横断的な視点でのカリキュラム作成」については、教科等の単元・題材の内容に応じて、どのように関連させるかという「内容」に着目するだけではなく、目指す資質・能力の育成のためにどのように関連させるか、または合科にするかなど、指導者側の目的に応じてカリキュラムを作成していくことが大切である。さらに、総合的な学習の時間等においては、個人やグループごとに課題が依存されることも多く、学級全体の学習として他教科等との関連等を考えることは困難な場合もある。さらには、目指す資質・能力を育成するために適切な教科等横断的なカリキュラムを作成し、実践されなければ、もう一つの側面「評価と改善の充実」には機能しないということは自明のことである。高野が、第5学年の実践でこれらの問題に直面したことは、考察の中で述べているとおりである。

高野は第5学年での実践の考察を踏まえ、第6学年では、『カリキュラム・マネジメント表』の作成に課題解決の糸口を見いだした。そのよさは高野が分析・考察したとおりであるが、「学校教育目標を教員一人一人が具現化する」という視点でみると、まさしく、学校教育目標と子どもの活動と成長をつなぐ具体的なプランと言える。ただ、学校教育目標すべてを具現化する構想を考えることは理想であるが、まずは、重点目標一つ程度に絞り、丁寧な評価と改善を繰り返しながら実践していくことが大切であると考え。無藤(2017)は、「今回の改訂で、カリキュラム・マネジメントや授業研究について言及しているのは、移行期間に頑張っただけで100点満点のカリキュラムをつくり、それを10年間粛々と実践すればよいというわけではないからです。小さくてもよいので、子どもの実態に即して改善を図り、その結果としての子どもの変容を見取りながら、さらに改善を図るという取り組みを、し続けていきましょうというメッセージなのです。」と、無理なく継続的に実践していくことの重要性を述べている。強く共感できるし、前述した山形県小学校における「学校教育目標の具現化等」及び「カリキュラム・マネジメントの認識と取組等」の調査結果を見ても、必然のことであると考え。

いずれにしても、高野が作成した「総合的な学習の時間『地域のよさをPRしよう!』」を中心にした『カリキュラム・マネジメント表』は、学級担任の視点からの、しかも、総合的な学習の時間を中心にした一つの単元の小さな実践である。このような小さな実践を

積み重ねながら、「カリマネ三つの側面」に留意したカリキュラムを作成し、評価と改善を繰り返しながら、目標を達成していくことのできる力を一人一人の教員が高めていくことが大切である。

本論主題に対して明らかになったことの二つ目は、学級担任の実践の履歴が学校全体の計画を更新したと云うことである。

高野は、総合的な学習の時間における『地域や学校の特色に応じた課題』に関する学習を第5・6学年2年間にわたって実践し、その実践の履歴をもとに「山三小総合的な学習の時間の全体計画」を改善していることは注目すべきことである。各学校の教育課程は学校や地域の実態を踏まえることは勿論であるが、特に子どもの実態を適切に把握して編成されることが望ましいと言える。学級担任の実践を基にした成果と課題から、進めてきたカリキュラムを見直し、その改善案を考え、学校全体の計画を更新していくという進め方は、教職員全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの一つの好事例と言える。

(中井 義時)

## 注

1) カリキュラム・マネジメント」の表記については、文部科学省等の文章等で登場する以前から、カリキュラムとマネジメントを「つなぐ」ことを重視した、中留、田村知子により「カリキュラムマネジメント」と表記されてきたが、本稿では、文部科学省が統一して使用してきた、カリキュラムとマネジメントを分け、引用文以外は中黒で「つなぐ」という「カリキュラム・マネジメント」と表記する。

2) 中井が、山形県内で中堅教員等として活躍している118名(小学校10年経験者教員39名、小学校教務主任53名、指導主事26名)を対象に、「①学校教育目標の具現化等に関する調査」「②カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査」を実施したものである。(2017.4.19～2017.9.12)

## 引用・参考文献

中央教育審議会 2008, 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」,

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf) (最終閲覧日2017年11月1日).

中央教育審議会 2016, 「幼稚園, 小学校, 中学校,

高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」,

[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (最終閲覧日2017年11月1日).

中央教育審議会 2003, 「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について(答申)」,

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03100701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03100701.htm) (最終閲覧日2017年11月1日).

文部科学省 2017, 小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編.

文部科学省 2017 小学校学習指導要領

文部科学省 2017, 小学校学習指導要領解説総則編

田村学 2017a カリキュラム・マネジメント入門 東洋館出版社 p30.

合田哲雄 2015, 「これからの学校管理職に求められるカリキュラム・マネジメント」, 『教育研修』2015年6月号, 教育開発研究所, 18-21.

文部科学省 2017, 小学校学習指導要領解説国語編.

無藤隆 2017, 「考えるための道具を子どもに渡し、自立して学ぶ人を育てる教育改革を目指す」, 『総合教育技術』2017年10月号, 小学館, 42-44.

文部科学省 2008, 小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編 東洋館出版社.

田村知子 2014, 「カリキュラムマネジメント一学力向上へのアクションプラン」, 日本標準ブックレット

田村知子 2011, 「実践・カリキュラムマネジメント」, ぎょうせい

田中統治 2005, 「確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント」, 教育開発研究所.

田村知子 村川雅弘 吉富芳正 西岡加奈恵 2016, 「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」, ぎょうせい.

中留武昭 田村知子 2004, 「カリキュラムマネジメントが学校を変える」, 学事出版.

中留武昭 曾我悦子 2015, 「カリキュラムマネジメントの新たな挑戦」, 教育開発研究所